

沖縄へ

日本聖公会 全国青年ネットワークニュース



(写真 - 昨年の沖縄週間) 辺野古の海岸にて。

下記の文章は、九州教区の佐藤さんが、沖縄教区の教会や辺野古に座り込みに参加している沖縄教区の青年にお世話になって、最近沖縄を訪れた時の報告です。

なお、今年六月には沖縄教区と管区正義と平和委員会の主催による『沖縄週間・沖縄の旅』が予定されています。スタッフとして参加することになった京都教区の佐藤さんから、参加が呼びかけられています。

今、沖縄で起きていること

「沖縄にいくなら、辺野古(へのこ)にいくといい。そして座り込みしてくれば? 沖縄のおじい・おばあたちが体を張って戦ってるし。そしていろんな人と会ってくればいい!」

「へんこ?」とそれ? 座り込みってなに? この会話はわたしが沖縄に発つ一週間前に柴本牧師と交わしたものです。わたしはそれまで、「辺野古」という地名すら知りませんでした。

立てる計画をしていますが、

そこでこの海を守るために立ち上がったのが、地元のおじいとおばあちです。おじいとおばあちたちは、二六三九日という長い間ずっと、

辺野古の海岸に座り込み、建設を阻止してきました。にもかかわらず、防衛施設局(つまり政府)は基地建設計画の第一歩として去年四月一日に海底ボーリング調査をしようとしたのです。その日から、辺野古では陸での座り込みとともに、海上でも、施設局が設置したボーリングを固定するための「やぐら」にしがみつき、調査を阻止する戦いが始まりました。

この戦いは毎朝七時に「海上阻止組」と「座り込み組」が円陣を組む

沖縄週間/沖縄の旅アピール
私は、昨年の沖縄週間/沖縄の旅、また全国青年大会「長崎から発つ」に参加し、実際に沖縄戦や原爆投下があったその日その場所を話を聞き、感じるという事は、机上で事実を知るのは大違いだということに気がつきました。

戦争は今までの生活を一瞬にして変えてしまいます。私たちは戦時下の人々が体験した悲惨さ無残さ、今も残る傷跡を受け継ぎ、その平和を痛切に願った人々の思いを次の世代へ伝えていくことが本当に大切だと思います。

今、自衛隊派遣や第9条改憲など

私たちが願う平和とは逆の方向へ進もうとしており、「力」が国を動かす手段となりつつある気がします。沖縄の辺野古では米軍基地建設反対を訴え、毎日座り込みと海上行動が行われています。その代表は、この米軍基地を許してしまったら今日日本がぎりぎりこらえているものが一気に崩壊すると思う、と言われま

した。
沖縄で共に私たちが受け継ぐ歴史を考えてみませんか。ぜひ実際に足を運んで学んで欲しいと思います。
京都・奈良基督教会/佐藤由佳(沖縄週間/沖縄の旅スタッフ)

ことから始まりました。「沖縄は人が人を殺すことが、どんなにむごいことかを知っているからね、人を殺しに行く飛行機をこの沖縄から飛ばしたくないだけさ」。まだ、戦争は終わってないさ。

わたしは、この言葉を聞くまで、日本が参加していた戦争は過去のものとばかり、思っていました。しかし、確かにこのおばあが言うように日本から戦地に向かう飛行機が飛び続けるかぎり、確実に日本は、そしてわたし

は戦争に荷担しているのです。その事実を目の当たりにし、わたしは恐ろしくなりました。そして、なんとでも、この事実を変えなければいけないと痛感しました。

わたし達の未来はわたし達がつくるものです。私たちは今まで学んだ「平和」を今こそ実行に移す時が来ているのではないのでしょうか?
佐藤真幸/九州教区・久留米聖公会(佐賀祈りの家)

長崎に立つ(九州)

青年大会の受け入れを行った九州教区「平和を考ふるプログラム(平プロ)」実行委は、第6目の平プロを三月十九日、二十日に長崎にて開催。大会後初のテーマは、語り継ぐために。京都、東京からの参加者も含め全一七名。

「八月九日の地獄」
「八月九日までの地獄」という新海さんの言葉に衝撃を受けた。原爆が落とされた長崎。一発の爆弾によって、何万人もの人々の命が犠牲が夢が消えた。原爆資料館には、原爆のすさまじさを語る資料や展示が圧倒的に多く、核兵器の恐ろしさを伝えていく。八月九日の地獄もしくは、八月九日からの地獄」が伝わってくる。しかしその裏側で、八月九日までの地獄があった。朝鮮から強制連行で日本に連れてこられ、三菱造船で働かされていた除正雨(ソ・ジョンウン)さんが、戦後、高校生から原爆について聞かれたとき、「原爆が落ちてよかった」と話したという。原爆が落ちたことによって、強制労働から解放されたという思いがあったという。「落ちてよかった」という言葉を私は正面から受け止めきれずにいた。もちろん強制連行や侵略、虐殺、慰安

婦、など加害者としての日本について学び、日本は本当に大きな罪を犯し、きちんと謝罪しなければいけないと認識してはいた。が、受け止めきれない。アメリカがもう終戦にもかかわらず自国の世界的優位のため使用した原爆。冗談じやない。アメリカが実験を行った日本のその街には、より良く生きていたと願い、夢を持っていた多くの人が住んでいた。八月九日に、妻と四人を一緒に亡くした松尾あつゆきさん。妻や子が次々に死んでゆくさまを詩にしている。「こときれし子をそばに、木も家もなく明けてくる。すべなし地に置けば子にむらがる。臨終、木の枝を口にうまかとい。さとうきびばい。想像すればするほど、悲しみと怒りの気持ちが湧き上がってくる。なんでこんなことになったんだ。しかし、同じような悲しみや怒りを、逆に日本が多くの人々に与えていたとしたら。もし仮に、原爆を

落としたアメリカにも、日本が原爆を落としていたら。その原爆についてどう思うだろう。あんなにひどいことをしたのだから報いを受けて当然だと思ってもいい。原爆が落ちてよかった。その言葉の中に、日本が与えていた苦しみ、八月九日までの地獄」に対してのどうしようもない怒りが込められている。一日目の新海さんの話、二日目の森口さんの話を通して、「原爆の光と影」を知り、原爆が落ちてよかった」という言葉の裏にあるものを少しずつだが感じていくことができた。ただ、正直今でも自分の考えがまとまらない。色々な受け止めきれない現実を押しつぶされそうである。白黒がはっきりつけられない。それが現実なんだろうけど、でもそれを知って自分がどう動いていくか、どうその現実を伝えていくかそれが大切なんだと今は思う。平プロテーマ「語り継ぐこと」。一人では押しつぶされそうだが、仲間と共に支えあい、勇気をもらって、語り継いでいきたいと思う。
平プロ行ってほんなこつよかったばい!
(東京・池袋・加藤篤史)

京都

日韓聖公会青年交流キャンプ分がち合いの会
二月三日、京都聖ステパノ教会にて、京都教区青年有志により行われ、七名が参加(内・他教区四名)。日韓青年交流プログラム今後の可能性について話し合いました。(京都・聖マリア・藤原健久)
中国・韓国訪問交流報告会
二月六日、八木基督教会にて行い一八名が参加しました。この会では、NCC(日本キリスト教協議会)の中国訪問団や日韓青年交流プログラムに参加した青年が報告を行い、それを受けて語り合い、交流の時を持ちました。なお、出張スライド報告会、応相談。(京都・八木基督・中井美和子)
ニュースレター発行
京都教区青年ネットワークのニュースレター「FACE to Face Vol.5-2」が、昨年一月三日に発行されました。二〇〇名の青年に配付しています。
今号は、全国青年大会の報告と感想、日韓聖公会青年交流キャンプの感想、サッカー大会の報告、今後の予定などが、その内容でした。(京都・聖ステパノ・小林聡)

神戸

「賛美」これが今回青年交流会の準備会で決定した夏に行う青年交流会ディスプレイショーキャンプのテーマです。詳しく言つと、賛美の意味の確認、方法。賛美における姿勢を考え、最終的に自身自身の賛美を見つければという意味を含んでいるテーマです。
これを決定した準備会は三月九日から二泊三日で福山諸聖徒教会で行いました。話し合いの内容としては、メインのディスプレイショーキャンプのこと以外に青年交流会の中心となるスタッフの決定(副リーダー、会計、広報など)、ワークキャンプについてなどを主な話し合いとしてもち、「キャラバン」という、自分達の足で各教会に赴き青年交流会の事を知ってもらおうという働きを始めてみようか、という話しもしました。
夢であった事が実現に向けて一歩進んだ事

中部

「賛美」これが今回青年交流会の準備会で決定した夏に行う青年交流会ディスプレイショーキャンプのテーマです。詳しく言つと、賛美の意味の確認、方法。賛美における姿勢を考え、最終的に自身自身の賛美を見つければという意味を含んでいるテーマです。
これを決定した準備会は三月九日から二泊三日で福山諸聖徒教会で行いました。話し合いの内容としては、メインのディスプレイショーキャンプのこと以外に青年交流会の中心となるスタッフの決定(副リーダー、会計、広報など)、ワークキャンプについてなどを主な話し合いとしてもち、「キャラバン」という、自分達の足で各教会に赴き青年交流会の事を知ってもらおうという働きを始めてみようか、という話しもしました。
夢であった事が実現に向けて一歩進んだ事

「平和がよい、戦争は悪い」と言うだけで終わりにしてしまふのではなく、実際の戦争が起きているこの世界・この社会の中で、私たちが生きていくこの歴史の現場で、私たちがスチャンは、自衛隊がイラクに行くことになった現実について、そしてこれから続くそれらな戦争について、どう対処していくべきかということについて考

えを深めることができました。
三日目には、松代大本営跡に行きました。地元出身の中部教区の青年、飯野勉さんに案内・説明してもらいました。彼は、大本営をたずねた人が「これを九ヶ月で作るとは昔の日本軍はすごかった」という感想を言っている。これは、平和の大事さについてきちんと考えてもらうために、このボランティアを続けているそうです。
洞窟の中で、ここが昔は戦争に使われた場所であり、現在も戦争賛美に使われかねないが、このように平和をめざして語り継ぐ人がいるからこそ、ここが平和を伝える場所となりつつある、ということも思いながら、平和の祈りを唱え、会を閉じた。(中部・新潟聖パウロ・丁胤植(チヨウ・ユンシク))

昨年長崎にて開催された全国青年大会の報告書『長崎から発つ』は、三月一〇日に発行され、既に青年大会参加者及び日本聖公会全教会に配付されました。

このニュースに掲載されている今後の様々なイベントの詳細に関するお問い合わせは、全国青年ネットワーク事務局でどうぞ。全国青年ネットワークMでもご案内しています。これを機会にぜひご登録を。☎9 上で登録可能。

アジア太平洋学生青年大会 (ASYG)

二〇〇四年二月、インドネシアで行われたASYGに参加してきました。今回のテーマは、平和と和解に向けて共に歩もう、ということ、様々な国の人たちとテーマに基づき、分かち合う機会を得ました。

今回学んだ大きなことは、「対面的な関係」の持つ意味についてです。大会を通して感じたことですが、日本は先進国の一つであり、感覚としては欧

米の方に近いにも関わらず、アジアの一国でもありません。戦争に關してはアジアに対する加害国でもあり、原爆という多大な被害を受けた唯一の国でもあります。アジアブームでアジアに近い感覚を寄せていないから、靖国参拝や憲法改正といった戦争ができる国に向けての動きも懸念されています。日本独特の立ち位置というものがあ

達はよくも悪くも多大な関心を持って見ている、見られていない、という感覚を肌で感じてきました。今後日本人の一人として、日本からの発信、というものがどのようなものであるべきか、強く考えなければならぬのだと思います。

また、異なる文化の人が何を考え、何を感しているのかを対面的に「聞く」という経験も重要な意味を持っていったと思います。自分達が何か行動するとき、「関心」を持っていないれば自発的に動くことは難しいけれど、一度対面的な関係を築いたら関心を持たずにはいられなくなってくると思います。これは身近な関係にも充

分言えることだと思

SCM現場研修

(三月五日)一日、大阪生野・釜ヶ崎にて。SCM協力委員会主催。日本聖公会からは六名が参加。

「生野の風を感じて」「朝鮮」という言葉が大嫌いだった。大嫌いなというよりも、どうしても言えなかつた。理由として表記するのはとても難しいが、「朝鮮」というと、「チョーセン」に聞こえてしま

いそうで嫌だったのだ。「韓半島」「北韓」「南韓」等、半島の名前も国の名前も言えるものは全て、「韓」と言っていた。生野で過ごすうちにいつのまにか、侮辱の言葉でない「朝鮮」を言えるようになって

いた。もし、私が「ザイニチ」だったら、と思う。この問題に「もし、なんていう言葉はありえないし、私が海外で住めば、否応無しに「在日」なのか日本人」になる。しかし、一番身近にする問題提起の方法としての「もし、私が在日だった

ら」と生野研修中に考えていた。今回、生野で出会った方々の共通点はどこかで「私はザイニチである」ということを自覚し、「なぜ、この大阪にいるのか」ということを分かっている方々だった。知

りたきつかけは、民族学校であったり、自分のルーツを探していく途中であつたり、半島から渡ってきた親の姿をみてだったり、様々だった。

研修が無事終了した今だから言えるというわけでもないし、未だにどう答えたらいいのか分からないけれども、私が在日だったら本名で生きるか、通名で生きるか、という問題に「私が在日なら本名で生きる」と答

えたいと思う。朝鮮名という事でひどい差別を受けても、本来の名前で生きる。それが本当の名前で本来の姿であるからだ。ただし、時には通名も使うだろう。両方を知った上で、本名を名乗りたいと思うだろう。それを押し付ける気はしない。「あなたは本名を持っていてるから本名で生きるべきだ」とも思わない。

今回の発題者であつた全小百合さんが言っていた。もっと「過去・現在・未来を知り」たいと思う。そして、そこから何を感じ取れるかを一番重要視したいと思う。

去年、韓国に行った時に韓国人から言われた言葉。「おかえりなさい」。韓国も北朝鮮も、異文化(別の国・別の民族)ではなく、隣国文化(韓流)でもなく、日本と同じ文化圏(東北アジア)であり、元は同じ民族から派生している。共に生きていくことをこれから考えたいと思う。

青年プログラム参加

管区青年委員会では、加助成制度を運営しています。聖公会の青年が、何らかの研修等に参加する際に、青年自身

が、青年委員会に申請することにより、研修費用等の一部が補助されます。(ネットワーク事務局が窓口)日本聖公会の青年たちが、キリスト教内外の様々なプログラムに参加し、その経験を日本聖公会、特に青年活動に活かすことを目的とするもので、今までも青年委員会では、エキキムニカル(超教派の)プログラム等に参加する青年に補助を出してきましたが、それをより充実させるために始めました。詳しくは、ホームページに掲載。

日本聖公会の全国各地の青年たちの動きについても、長崎での青年大会を始めとして報告しました(全国青年ネットワーク)の報告などが行われました。

全国青年担当者会議
各教区ごとに1-2名任命されている青年担当者による会議。二月一日、二日、七月一七-一八日に開催。

発行所 日本聖公会全国青年ネットワーク事務局
名古屋市中区宮東町200名古屋学生青年センター内
tel 052-781-0165 fax 052-781-4334
e-mail youth.po@nsskk.org
web http://www.nsskk.org/province/youth/